

東亜同文書院・岩井公館・潘漢年の思い出

小泉清一氏に聞く

日中戦争開始前後の東亜同文書院での学生生活、外務省の岩井公館の活動と汪兆銘による和平工作、情報を求めて汪政権とも日本側とも接触する中共の情報工作担当者の潘漢年や袁殊、日中戦争の複雑な局面を当時渦中にいた小泉氏に聞く。

小泉清一

（元外務省嘱託・元岐阜県日中友好協会理事）

馬場毅

（愛知大学現代中国学部教授）

三好章

（愛知大学現代中国学部助教授）

三好 本日は、戦前、東亜同文書院大学を卒業された後、中国で各方面にわたるお仕事をなさった小泉清一さんにお越しいただいております。さっそくいろいろお伺いしたいのですが、散漫になってもいいかもしれませんので年代順にお話しいただければと思います。

東亜同文書院時代

三好 東亜同文書院の三五期というところ、

一九三五年に入学されたのですね。

小泉 ええ。一九三一年に満州事変の発端となる「九・一八」（柳条湖事件）が起こって満州国が建国され、その頃から排日・抗日が上海で非常に活発になりました。

私が入学した翌年に魯迅が亡くなったので、一九三六年の秋、一〇月二二日に葬式があったことになりました。その葬式の列は学校のそばを通って、近くにある万国公墓に葬られました。学校から

ちょっと離れたところで、なんか葬式があるらしい、えらいデモをやっているらしい、とそれを見に行ったことを覚えて

います。青年がすごい勢いで「抗日」を説いている姿に、これは本腰を入れて中国の愛国運動、抗日運動をもっと知らなければと、学習意欲を盛り上げられましたね。それまではただのほんとは「国際都市上海というのは面白いな」という意識があっただけでしたが。

勉強するには、中文ですがマルクスや

エンゲルスの本がたくさんありました。後で聞いた話によると、中国共産党の王学文などは、同文書院に対する活動を担当していたらしく、熱心にやっていたようですがうつつすらとした記憶しかありません。

同文書院の学生で反軍行動をしたり、「帝国主義、軍閥は中国から撤退せよ」など過激なビラを配ったり、上海の労働組合「解放同盟」といっしょに活動していた人たちは、同文書院二九期の中西功さんなどです。私は三五期ですから、そんな人々は卒業した後です。

彼らが集まっていたのは、書院の中では「文芸部」でした。文芸活動というのは左翼文芸と一派通ずる空気があって、学芸部が根拠地になっていました。

同文書院は自由な学風で、一方では右翼の、柔道をやって高下駄を履いて街を歩くという旧制高校時代のような雰囲気もありました。そうかと思うとフランス租界辺りで、革命から逃れてきた白系ロシア人が我々が入りやすいようなレストランをやっていましたから、そこへもつ



小泉清一 [Koizumi Kiyokazu]

東亜同文書院三五期。元外務省嘱託。
元岐阜県日中友好協会理事

ばら出入りしているのもいました。まあ、いわゆる闇の女も比較的手が届きやすく、また金持ちもいましたね。満鉄などから派遣学生として来ているものはサラリーが入るので割合に金があつて、私の同期生などは日本人相手のところに飲みに行かずに、いつも外国人、ロシア人の所へ行っていました。

国際都市上海という雰囲気からか、そういう社会にごく自然に接触し入り込んで、英・米・ヨーロッパ文化を非常に身近に感じていました。なにしろ住んでい

る人間も、華北の田舎の泥臭いのは違っていましたから(笑)。

一九三七年、ちょうど夏休みで日本に帰っているとときに「七・七」(盧溝橋事件)が起こりました。中国の蔣介石の軍隊に学校が占拠されたために帰れない。それで長崎の師範学校を借りてまず臨時開校して、翌年になってから上海に戻って交通大学を無断借用しました。

三好 無断借用ですか。

小泉 はい。中国の抗日、愛国学生は占領地を逃れて奥地で勉強していました。

北京大学・清華大学・南開大学が昆明に避難して設立した西南連合大学のよう
に、上海交通大学も避難してしましたか
ら空き果みたいに入りこんで、なんと
嫌な思いでした。

私は学生当時からいろんなことをやり
ました。先発隊として戦争地域からの避
難民がたくさん学校の中に無断で住み込
んでいた。その人たちに日本の軍隊、憲
兵の力を借りて退いてもらって、そして
開校準備。学生を五人ほど選抜して、中
国側といろいろ折衝したりしました。

人間が大勢集まると排泄物が問題にな
ります。多くの難民で普通のトイレでは
間に合わずそのうちに屋外のあちこちで
用をたすので、まずはその糞の始末です。
朝から晩まで大きな穴を掘ってそこに臭
いものを投げ込む。作業していると、子
供が私を「米田共」だと。「糞」という字
を分解するとそうなるでしょう。やはり
漢字の国だ。小学校の五、六年生ぐらい
の頃からうまいこと言うなあと（一同
笑）。

長崎に避難している時から、私はいろ

いろなことがわかるようになりました。
我々の一年上の最上級生たちは、従軍通
訳をしていたのですが、帰ってきた人た
ちが口々に「もうがっかりした」と。「皇
軍とは何だ」「掠奪、強姦がひどい」と。

学生の純な心で、言葉が何かと不便だろ
うから軍隊に付いて通訳をと思っていた
のが、通訳などはもつてのほかで実は掠
奪の道案内だった。初めは一生懸命道案内
したけれども、「もうそんなことはでき
ません」と言ったら今度はどやしつけら
れた、と。このとき耳にしていたことが、
いわゆる南京虐殺に繋がっていくわけだ
す。

上海付近の戦線は、中国軍が強硬だっ
たので、日本の軍部は短期決戦をめざし
ていました。「七・七」が起こつてから、
華北でちよつと戦つてはその地域を特殊
化する。「中華民國臨時政府」とかいっ
て。そして、一旦軍隊を進めたら次から
次へと戦線を広げていった。七月七日に
盧溝橋事件が起こつて、八月一三日ごろ
上海に飛び火して、それですぐに南京が
陥落するなんて……。華北は軍閥くずれ

の兵隊ですが、それと違って上海付近は
中央直属の軍隊ですから、日本軍も相当
な資金をつぎ込んで特務機関が工作し調
査をしたけれども、さっぱり効果がなく
とうとう戦争拡大。

上海の前面の中国軍を退かせるには背
後に回らないといけないと、杭州湾に上
陸して、後ろの方から包囲するような態
勢で戦闘が起こつた。そこでようやく撤
退が始まり、当然戦争の目標は南京です。

南京が陥落すれば蒋介石はすぐ倒れる
だろうという「一撃論」を信じて、兵隊
は一刻も早く南京を占領すれば、後はも
う凱旋できると、この機会に好きなこと
をしてやれとばかりに各部隊が先を争つ
ていったので、惨憺たることになったん
でしょうねえ。

しかし、三〇万人が虐殺されたという
説には従軍した人々はどうしても納得で
きない、物理的にそんなことはできるわ
けがないと言っています。でも人数のこ
とをとやかく言つても仕方ないと、私は
思っています。

馬場 お話をちよつと戻しますが、七・

七事変の後、同文書院が焼かれますね。
小泉 ええ。

馬場 従軍通訳をしていたことが原因だと言われているですが、いかがでしょうか。
小泉 そういう説はありますが、具体的な証拠資料がない以上は推測でしか言えません。

軍隊というものは、やはり日本軍といわず中国軍といわず、負け際に撤退するときには、民衆から掠奪したり辺りの器物を壊したりして、何か証拠が残るよりはきれいさっぱり焼き払っていけという心理が働くものです。

日本の東亜同文書院の学生は従軍通訳に行った、そういう学校だった、というるはつきりとした理由はなく、推測です。

馬場 なるほど。

大旅行について

小泉 我々の時の大旅行では変則になって、中国大陸では日本軍の占領したところ以外は行けないので、仕方なく南方へ、

まだ大東亜戦争が起こつていけませんでしたから、ビルマやベトナムにできるだけ行くようにしていました。あとは物見遊山の観光旅行のようなもので、東北のハルビンまで二か月か、二か月半。

平和な時には、中国大陸の辺鄙なところまでもいろんな人が行つて実業界で活躍してましたから、そういう人を頼つて行つたり、また空白地帯でも学校からビザみたいなものを発行して、兵隊を通じて軍閥の支配する地域へも行かせていました。かなり辺鄙なところまで、本当に事故なしにみな旅行したんです。

私の時は軍隊のいるところにしか行けず、また軍隊の嫌なことばかり見てきました。

馬場 大旅行で行かれたのは東北だけですか。それ以外の占領地にも行かれたのでしょうか。

小泉 いえ。私の行ったのは太湖の周辺です。

あの水郷地帯の網の目のような水路を前にして、日本の機械化部隊が進軍して占領したといつても後が大変だろうと感

じましたね。後にわかったことですが、点と線を押さえるだけだったと、当然そうならざるを得なかったでしょう。

当時の流行で、他の大学なども学生の任意による一種の現地調査を奨励していました。軍隊に付いて来ている学生がいて、虎の威を借りる狐のように、「怪しい中国の奴だ」と中国民衆を捕まえては、「これは八路だ」と拷問にかけていた。日本の大学生が拷問をかけるのを初めて見た。脇の下にロウソクを入れて脇を焼く、酷い拷問を。その人は死にました。

太湖の南方の湖州という、文人を多く排出したところです。

一つの県を単位にして調査するんですが、調査したのは呉江県で、今は蘇州市の一部になっています。費孝通はあの辺りの出身で、若いころにそこで調査を行なっていました。

三好 そうですね。

小泉 彼は「郷村建設運動」や農村経済を早くから心掛けて研究し、呉江県についても本をまとめていたので、私は学生の時からその名前を知っていました。当

時彼は奥地の方に逃げていたんでしよう。旅行から帰った後、その呉江県に関する研究資料を手に入れて、自分の調査の参考にしようと思っただけですが、遂にそれを探すことはできませんでした。戦後になって費孝通が大いに活躍していることを知って、懐かしいなあと思っただけです。

それが最近愛知大学に、中国から来た人が……。

馬場 張琢先生ですか。

小泉 張琢さんではなく、もう一人、臨時に来られた房建昌さんが、北京の図書館に同文書院の調査旅行書が残っていると、虎ノ門で講演があった時に言ったのです。私は前の方に座って聴いていますが、私の書いた呉江県の調査旅行もきちんと残っている。

大旅行の調査目的地に三週間も滞在したのだから、水郷地帯の美しさ、大運河の経済効果の偉大さは今もはっきり頭に残っていますが、正義感に燃えた学生がどんな調査にまとめあげているか、大変、深い関心をもっていきます。

馬場 旅行は何年のことになりますか。小泉 卒業前だから一九三八年、その春からです。三八年というの一〇月に武漢が陥ちた年です。

馬場 そうですね。

小泉 軍が占領して間もない地域の旅行は、全部兵站司令部に連絡し、宿泊もその指図によるので、自由がきかず窮屈で、地誌的な知識と経験を積むくらいの価値は、全部兵站司令部に連絡し、宿泊もその指図によるので、自由がきかず窮屈で、地誌的な知識と経験を積むくらいの価値は、全部兵站司令部に連絡し、宿泊もその指図によるので、自由がきかず窮屈で、

強かった。それで、南京を素通りするようになかたちで津浦鉄道を北上し、徐州、濟南に立ち寄って、北京に入りました。

徐州は激戦の末、五月中旬の占領からまだ二か月前後しかたつておらず、町中に兵隊が溢れ、殺伐とした雰囲気でした。

変則的な大旅行で、私の印象としては、日本の軍隊は本当にでたらめだなあと感じました。中国の民衆とは完全に対立して、日本の軍隊の行くところ、残っているのは子供と乞食と年寄りばかり。昼間は、軍隊の姿の見えないような田舎の方には、若い人々も、何をしているのだから分かりませんでした。調査に行つて

も十分なことはできません。

当時の特務機関には宣撫班というのがあつて、その宣撫班に「民衆に日本語を教えてやってくれ」と言われて、教えたことがありません。ところが、子供や年寄りのおばあさんしか来ない。子供の遊び場みたいで、ともに日本語を教えるような状態ではない。否応なしに「出る出る出る出る」って言われるから来たんでしよう（笑）。日本の占領地というのは、惨憺たるものだと思いますね。

自然環境はご承知のように水郷地帯で、何とも言えず良いところですよ。

馬場 太湖というところ、昔の太平天国の時に、あの地域に巢船というのが出てきて、他船の掠奪と塩の密売をやるんです。太平天国後には、そこに青幫の組織が広まっています。

小泉 なるほど。

馬場 そのように青幫が強いところですが、まわられた時はいかがでしたか。

小泉 ああ。舟運はみな青幫などの保護がないと、掠奪されるからね。

馬場 実際にご覧になりましたか。ある

いはそういう話をお聞きになりましたか。

小泉 いや、なんとなしには。

舟運を使って、水郷を縫って行けば、いわゆる大運河へも、ずっと太湖を通って南の方へ、杭州辺りへ繋がるし、それから揚州の方へも、鎮江の辺り出て行ける。舟運ですと繋がっているのを自分で体験しながら大旅行を行ったわけです。

岩井公館と汪兆銘の和平工作

小泉 大旅行が済んで、今度は就職活動に入るわけですが、その頃、汪兆銘が和平工作に始めそうだと新聞にも出ていたことから、私は汪兆銘に注目していました。

なにしろ実業界に、商社には入る気はなかった。そうかといって満州の協和会や、それが華北に軍隊と一緒に付いて行った新民会などにも行く気にもならない。新民会には我々の先輩もいっぱいいるわけです。

満鉄の調査や、華中、華南で政治活動がやれないかと見ていたら、外務省で先輩の岩井英一さんが派手に活動していました。

岩井英一さんはいわゆるノンキャリアでした。外務省では外交官試験に通ればキャリアですが、書記生試験では下士官なんです。そのため若いうちはみな、武漢の奥の方や昆明や重慶や、もう奥の方の領事館ばかりに行かされる。だから中国語は非常に上手くて中国人との人脈もそれぞれあるんだけど、やはり現地と外務省本省は距離的に遠かった。

岩井さんは外務官僚らしからぬ人物に見受けられたし、「小泉君、ひとつ一緒にやってくれんか」と引き受けてくれました。私がほぼ一期生で、それから同級生が二人、三人続いて、後輩の三六期生が五、六人、と芋づる式に入ってきました。学校の就職担当の先生が「岩井君、優秀な学生をそんなに引き受けて大丈夫かい。身分の保証がちゃんと出来るんかい」と確かめたくらいです。我々も身分なんてことは考えずに、「汪兆銘」「和平

工作」、その政治運動に自らが関わり合いたくてそれで岩井公館に入ったんですよ。しかも私はすぐに香港に行きたかった。ハノイから香港に、汪兆銘一統が出てくるので、そういう若い人たちと一緒に和平工作の一端を担いたいと、香港に行きました。

三好 それは三九年あるいは四〇年でしょうか。

小泉 卒業は三九年です。

三好 何月ごろでしたか。

小泉 香港に行ったのは六月です。ご承知のように卒業は三月ですが、どこでどんなことをするのかわけがわからないし、岩井さんのところでもたまたまして、私は第一期生ですから、まず岩井さんの抱持ちをして、壮士然としていた(笑)。

馬場 それは岩井公館で雇われたのですか。

小泉 結局は外務省囑託です。

馬場 囑託ということで岩井公館にお入りになった。

小泉 そうです。岩井さんと和平工作や

りたい、それだけです。身分にはこだわらない。だから学校の就職担当も「岩井君、大丈夫か」と言うわけですね。今から考えてみると無茶なことですよ。

岩井さんから実際に引き受けた香港での仕事は、奥地の国民党の資料収集です。

陳彬和。もともと寧波の人で、『大公報』の編集をしていたいわゆるジャーナリストですが、それが軍閥の系統からいくと広東の陳銘樞、広西、桂林の李宗仁、白崇禧などにやや深い人脈がありました。その人脈から桂林、重慶辺りの情報が入ってくるのを香港でキャッチしたり、あるいは表面的なもの、新聞などの情報は一番早くに手に入れて、上海へ送るといふようなことから始まりました。

使い走りみたいな用でついでに接触を持ったことがあります。上層部にはとても関わりが持てるはずはないし。

しかしその時に感じたのは、上海辺りのいわゆる浙江財閥とか、いわゆる軍人、商売人とは違った雰囲気ですね。やはり広東系統の、「政治革命をやる」という広東人の激しい気性を感じました。また動

作が機敏で、瀟洒な、洒落た人が多かったように思う。若い連中がたむろしているところに行くと、本当に熱気を感じた。特に今でも覚えているのは、林柏生ですね。汪兆銘も広東出身で、後になって岩井さんに「汪兆銘に会わしてやろう」なんて言われて、私は汪兆銘と握手したことがあるんですよ。

今度は岩井公館の話をししましょう。私が香港に最初に行った時の総領事は、後に外務大臣になった岡崎勝男で、二代目は田尻愛義大東亜省次官でした。

香港は重要なポストで、総領事になる人はやはりそれなりの人物でした。その次の矢野征記はちよつと落ちたけれど、参事官や書記官にも優秀な人がやりました。ところが、我々同文書院の卒業生は副領事格で、いわゆる将校と下士官みたいな関係でした。その時にはそれほど気にしなかつたし給料のこともあまり考えなかつたけれど、よく考えてみると私たちの給料は、岩井さんが外務省本省からきちんと予算を取って身分が保証されていたと言えないと思いますね

(笑)。機密費の中から自由に出された気配を感じる。最近の松尾元外務省要人外国訪問支援室長の機密費流用事件、あの体質は正に今だからなるほどと頷ける。

要するに香港では、帝国外交の担い手であるという総領事館の体質を、その時非常に感じていました。二大商社、三井、三菱の支店長ともよく高級料亭に行っていたようです。

また当時香港では外国為替を一定のレートに安定させるために無理をしていました。ところが海の向こうの広東に行けば、円は香港よりも安い実勢価格で売買されている。極端に言うとうと、日本円で百円の月給を貰う、それが公定レートでは百香港ドルになる。ところが五〇香港ドルを闇で円にすると百円になる。その香港ドルはただで手に入ったことには、為替の割当てを商社が貰うためには、戦時に必要な物資を買い付ける名分が必要。商社は、外国為替を手にするだけでそれが商売になる。そんな裏側を利用するのを見たりすると、本当に嫌にな

りました。

実際には、重慶内部の抗戦能力の調査が命令されたことですが、それに付随して、国共関係の情報分析などもやりました。潘漢年から若干入手した情報もそういうものです。

馬場 情報は口頭ですか、それとも公開刊行物ですか。

小泉 公開刊行物もあります。

例えば新聞では奥地の『中央日報』や『桂林日報』、『大公報』もありました。当時『解放日報』はまだなかったかな。

馬場 『解放日報』になるのは四一年です。それ以前に最初は週刊で刊行された『解放週報』というのがありました。小泉 四一年ですか。別に共産党の公刊物として『解放……』というのもありました。

そういう資料を集めて外務省の公文書の判子を押したことがあります。外国の郵便でも、検閲を受ける必要のない公文書として毎日のように送っていた。急を要すものは電文です。電文が、どのような形で総領事の承認を得て外務大臣に

届くのか、もしくは上海の大使館で止まるのか。恥ずかしいことにその事情は何にも知らずに。

面白い話として、当時岩井さんは情報部長の河相達夫に可愛がってもらっていた。外務官僚のなかにもいわゆる欧米派などいろいろな派閥があるなかで、河相さんは軍の勢力が台頭していくのに添って、右翼的で軍との関係が非常に良かった人物で、特に大川周明と仲が良かった。それで河相さんは岩井さんが提案した機密費や工作費を割合通してくれていた。そう考えると我々の高官と金回りのルートがはつきりするけれど、外務省の会計の仕組みからいって本来の金の流れは極めてはつきりしないんだなあ。

この関係があったから岩井さんのところに、大川周明の一派だと称して、右翼の命知らずの連中が居候していた。香港に行く前に、岩井さんから「今日は酒を一杯ご馳走するから」と言われて行ったら、兎玉がいるし……。

馬場 兎玉警士夫ですね。

小泉 彼が「サインしてやる」って。「大

川周明さんから預かった」と僕は紹介を受けたが、あんな大物になるとはよもや思わなかった。そこで「明日、面白いことがある」と言われてなにかと思っていたら、上海の共同租界の英国行政担当の高官の部屋の前で「憤激に耐えん」と言つての腹切り。それから大川周明一派のものを優先で岩井さんなどが世話していた。馬場 岩井公館というの上海ですね。

小泉 岩井公館とは通称で、大使館特別調査班という調査部門と、袁殊を中心とした興亜建国運動など政治工作部門（中国人が多数居住する閩北にある）とに分かれていました。

中共黨員潘漢年、袁殊との接触

小泉 袁殊が、岩井公館を本拠にして行なった興亜建国運動という民衆政治活動は、いわゆる北支で新民会が一般民衆の自発的な組織だと称していたのと同様に、汪兆銘政権を支える民衆組織に育て上げたい構想だった。

その袁殊は中国共産党に関係を持った
り、国民党の藍衣社の方に関係したり、
また女癖も悪いという食わせ者でした
が、いわゆる汪兆銘政権がまだ弱体なの
で、陸軍の方からも「外務省の岩井はよ
くやる」と非常に評判が良かった。外務
省もかなりの金を袁殊に流したので、金
回りも良かった。

馬場 そうですか、今藍衣社とおっしゃ
いましたが、『潘漢年伝』（中国人民公安
出版社、一九九六）では軍統（国民党
軍事委員会調査統計局）という言い方を
していますが、要するに袁殊は、日本とも
いいし、国民党の軍統つまり藍衣社とも
いい。当時からご存知でしたか、袁殊の
正体なるものを。

小泉 いや。袁殊の正体はわからなかつ
たけれども、なんか食わせ者の要領のい
い男だとは思ったなあ。筆の立つ、非常
に肌合のいい男でね。香港にたまに来
ると、いい中国菜館に連れて行ってくれ
て。

皆さんの参考になればと思うのです
が、この『潘漢年伝』を出したために

尹驥とは懇意にしています。

馬場 この本の著者ですね。

小泉 南開大学卒業なのです。

三好 因縁浅からぬ、ということですね。

小泉 いや。同文書院の四四期で陳弘君
という、台湾籍で今は北京にいる後輩が
いるのですが、彼がいろいろ世話してく
れたので。彼は学校を卒業してからずつ
と大陸に残って、台湾籍だから苦労をし
て、初めて「ベテラン通訳賞」という称
号を国家から貰ったと言っていました
が、その彼が中国のテレビドラマに私が
出たのを一番先に知らせしてくれて、こ
本なども送ってくれたのです。このテレ
ビドラマを誰がどのようにして作ったの
かいろいろ調べてくれて、尹驥に行きあ
ったというわけです。

三好 なるほど。

小泉 僕の知っている範囲では、潘漢年
に関して、かなり尹驥は資料を持ってい
ます。公安関係者ですから、公安の檔案
などはかなり自由に見られるんでしょ
う。しかも南開大学卒業だから愛知大学
とも関係が深いので、必要があればご紹

介しましょう。

テレビドラマ『潘漢年』では、潘漢年
が香港に来て、廖承志に札束を投げ出し
て見せ、「これで情報機関、国際問題研究
所など作れるよ」と語っている場面があ
る。私は、潘漢年には直接岩井さんから
は渡してないと思うが、袁殊から行つて
るのか。今から考えると、袁殊という人
物は、岩井さんから上手に金をせしめて
は、いざという時は中共の助けを得て、
新四軍にもぐって、世の中をうまく渡り
歩こうという魂胆の男なんだ。その時に
ははつきりわからなかつたけれど……。
岩井さんは、情報工作を隠すために潘漢
年に金をやったというようなことはあま
り書いていません。これは非公開になっ
ているとは思いますが、これは非公開にな
見たらわかるかもしれません。

馬場 要するに潘漢年に直接渡してはい
ないということですか。

小泉 岩井さんが潘漢年に経常的に金を
出して中共からの情報を得ていたとは、
私は思いません。香港に来た時には、潘
漢年の一党とは私も会ったことはあるけ

れども。それから、普通の情報は読んだら掴んで食べてしまえるような物に書いて寄越しませう。

馬場 それを渡す時にはどのようにやっ
たんですか。

小泉 連絡は、一週間のうち曜日を決
めて、どこそこに何時にと。もし手違いが
あると、後からなんらかの方法を使って
以後の連絡をつけていきます。

馬場 私は以前、例のゾルゲ事件に連座
した川合貞吉さんが生きてる時にちよつ
とお話を伺ったことがあります。戦中あ
の方は中共党员でした。ご存知のように
日本人でも大陸にいたのは中国共産党员
でしたから、中西功さんもそうですが、
その時に連絡をどうやるかと聞いたこと
があるんですね。すると、どこか店など
で会って大体雑談をしている。そして、
ちらつと最後に重要な情報を流すと。そ
れから連絡する時には、五分経って相手
が来なかつたらそのまま去るとおつ
しゃっていました。同じですか。

小泉 私の場合は、ご承知のように香港
にハッピーバレーという山があります

が、そこより干諾道というちよつと薄暗
いような、谷間の路上での連絡です。

馬場 お会いになって、さつきおつ
しゃつた小さい紙で渡すのですか。

小泉 陳曼雲という女性が主に直接接触
していました。

情報は確かに来ましたが、私の手から
金を渡したことはありません。岩井さん
はたまにしか香港に来ることはなかつた
ので、まとまってお金を渡すしか機会は
なかつたと思います。あるいは上海で渡
したか。

三好 まとまったお金も、小泉さんが渡
したことはないわけですね。

小泉 (直接は答えずに)馬場先生のご承
知のように、尹騏の『潘漢年伝』二〇六
頁には、潘漢年の計画を、袁殊が取りつ
ぎ、香港に連絡拠点として『国際新聞社』
を設立し、その開設費および二か月の情
報費用、一万香港ドルを支払い、毎月二
回の情報提供に対して、経費毎月二千ド
ルと取りきめ、その受け渡しを小泉に担
当せしめるとなっています。情報は、確
かに何回も受け取りましたが、私の手か

ら金を渡した記憶ははつきりしません。

実は岩井公館には、上海でも一年後輩
の田中が潘漢年連絡要員をし、別の連絡
場所を持っていたし、岩井さんも時折、
香港に出張してきていました。別の話で
すが、岩井さんの著書『回想の上海』の
なかで、総軍司令部が蔣介石との直接和
平を目指して「桐工作」を重慶政權財政
部長・宋子文の実弟と称する宋子良を窓
口とし、今井参謀が相当熱をあげていた
のだが、潘漢年は、それは真つ赤な偽者
だ、と化けの皮を剥いでくれたのは、香
港での大きな手柄だったと喜んで書いて
います。

ここで、私の仕事を通じて得た情報に
対する考えをお話しておきたいと思ひ
ます。社会のことは、何事にしろ「ギブ・
アンド・テイク」の形があるが、人間関
係の根底には、相互信頼や、最終的には
「人ととなり」が大切です。潘漢年は、情報
のベテランと言われ、「虎穴に入らずんば
……」の危険を恐れぬ胆力と行動力、緻
密さと忍耐を兼ね備えた偉大な革命運動
家であり、岩井さんは「人を信じ、人の

腹中へ入る」底の特性は立派なもので、潘漢年の香港における廖承志との深い関係を通じ、宋慶齡ら民主同盟派への影響等も、早くより見透かしていたものと思っています。

また潘漢年は、日本側からの金銭の受け取りは、すべて袁殊のお膳立てによる形をとり、万一、党や上部の取調べに対して、自分は中国共産党のためになるような調査活動を敵の金で上手にまかしたんだと、自分の功績にする気持ちで働いているとしか、思わないなあ。

ごめんなさい。もうそれ以上、私に真偽の程はつきりわからないから、私に真三好 さようですか。

小泉 しかし事実だけはそういうことです。彼もやはり中華人民共和国建國後に囚われの身で、随分苦労したわけでしょうから。

私は船賃を出したり、船で広州湾まで連れて行ったことがあります。広州湾まで行った時には、広州湾の赤坎というところの旅館に泊まって、そこはもう香港ではなく中国内地で、よほど連中と一緒

に自分も中国に渡りたいなと思ったことがありますよ。

馬場 陳曼雲ですか。その時、逃がしたのは。

小泉 陳曼雲。陳曼雲はその後、映画監督と結婚したと尹驥から聞いています。

たしか有名な左翼系の映画監督、蔡楚生だったと思います。

馬場 そうですか。

小泉 当時、香港辺りで我々と接触したうちで、潘漢年の系統はやはりかなり幅広い。潘漢年はこのドラマにも出てくる

けれど、紅幫や青幫の杜月笙とも関係があつて、張大爺とかいう老人がいたりなんか……面白くテレビドラマに出てくる。

馬場 汪兆銘の特工総部の李志群についてですが、『潘漢年伝』を見ますと、要するに潘漢年が李士群と接触を持ちたがったので、影佐が間に立って……。

小泉 会わせてやるでしょう。

馬場 ええ。それは当時ご存知でしたか。

小泉 いや。当時は知らなかった。上海でのことだから。

馬場 李士群と連絡するにあたって関露という女性作家がいたようですが。

小泉 関露というのはよくわからない。軍隊に入る前、上海で岩井さんから宴席を設けてもらった時、袁殊と一緒に来たいたかも知れない。

馬場 お会いになったことはありませんか。

小泉 関露については、面白く書いてありますがよくわかりません。潘漢年の愛人が、香港のお金持ちの銀行家の娘というようなことも（笑）。

香港の印象

小泉 国民党の香港における印象ですが、僕が行ったのは前年の一〇月に武漢攻略があつた一九三九年ですから、左翼作家として知られる田漢が、武漢抗日劇団というのを引っつけて、香港最大手の劇場で抗日劇をやっていました。

田漢は日本への留学生だから、日本の軍人の悪い態度、傲慢な態度もすっかり板についていた。長靴をカッカッと履い

て、舞台狭しと暴れ、そして、夜民家に入っていった、強姦をする。妊婦を犯してその腹を裂いて、赤ん坊が男の子か女の子か、兵隊が二人で賭けをして騒いでいる。舞台を真っ暗にした中でやり取りのあと、きゃーっとな性の声が響く。そういう演出がとてもうまい。そして強姦された女の声で「今にあんたの家にも、日本軍が来る」と。「鬼子兵」。そういった凄まじい抗日劇をやる。香港で私は一人です。そういう抗日劇を見に行つて、いろんな思いをしました。

上海で軍による支配が厳しくなるにつれて、上海からは浙江財閥、また南京陥落に続いて武漢も陥落すると、いろんな有力者が香港に集まって来て、香港は華やかになりました。それまで広東人が多かったのが、上海語や普通話が多く聞かれるようになった。一流のレストランでは、ハワイアン・ギターの生演奏があつて、そういう洒落たレストランにみなが集まって、上海語、普通話で会話しているなんてことはそれまでありませんでした。

いわゆる援蔣物資の中継ぎや実業界の有力者が、上海を捨ててとりあえず香港まで来て、なんらかの道を探っていた。当時、西南運輸会社といつた援蔣ルートなども我々の関心の的でしたが、接触する機会がありませんでした。そういう人たちとは、ただ会話を聞いて「おそらくこれは上海系だな」とか思うにとどまっていた。

大東亜戦争が起こつてから、近づいて来て……。

馬場 向こうからですか。

小泉 それはそうですね。いよいよ日本側と手を組んだ方がいいんじゃないかという計算もあつたんでしょう。あるいは情報を探りに来たのでしょうか。西南運輸会社の人の家と呼ばれて行ったことがあります。いい家庭で、奥さんも綺麗な人で、ユーモアもあつて、英語が飛び出したり、いろいろな世間話をして帰ってきたけれども、その後、日本には愛想をつかしたとかで重慶に行つてしまいました。

これなどは公の立場ではなくとつた行

動ですが、私を感じていたのは、香港が占領されてからみないわゆる中国共産党の手助けをするようになっていった。それと前後して、民心が日本に全然付いてこない。愛想をつかしてみな奥地へ逃げて行く。それを見て「日本は将来、希望が持てない」という思いを深くした。

三好 みな重慶に引き揚げ始めたというのは、四一年末以降になりますね。

小泉 四一年大東亜戦争でしょう。四一年一二月のクリスマス・イブに陥落してから翌年の二月、三月までずっと引き続きです。それで私は憲兵から睨まれましたね。

馬場 それはなぜ。具体的な理由はあるんですか。

小泉 個人的に、反軍的だと。

いや、夜遅うまでうるうるして、歩哨が立っているところを「いやあ、ご苦労さん」と堂々と過ぎたり、時には酒を飲んだりして（笑）。やがて上の方でも「またあいつ、反軍的な工作やつているんじゃないか」と思つたんでしょう。また軍隊の徴兵検査を延期して海外にいたこ

とに対し、憲兵が嫌味みたいなことも言ってきた。

岩井公館

三好 岩井公館の仕事と憲兵隊、両者はやはり直接関係していましたか。

小泉 いや、関係は全然なかったと思います。

三好 では梅機関の晴気慶胤さんやその機関との関係というのは。

小泉 直接はあまり知りませんが、岩井さんは不思議と軍人からもてていました。興亜院という制度ができて、外務省のアジア関係、中国関係の業務を興亜院の一部に移し、それから大東亜省もできました。それらとの関係が複雑になるにつれて、岩井さんと大川周明や河相情報部長などとのストレートな関係もだんだんおかしくなっていった。

三好 複雑になっていったわけですか。

小泉 ええ。その上、キャリアからのやきもちがあったりして。

辻政信参謀が「東亜連盟」一本で行く

ことに決定したから、興亜建国運動は解散して、袁殊も結局、我々と一緒に岩井さんの調査だけは細々と続けていた。けれども、岩井さん個人の、袁殊や潘漢年などに対する比較的潤沢な工作資金の出所はなくなってきた。

岩井さんからは何も言っていないから、僕の身分ももう身売りされたようなものです(笑)。香港総領事館でも適当な費用を捻出したんでしょう。おとなしく総領事館の一職員というような顔をして、できるだけ貰っていました。だから中共の連中を逃がしたのも、個人の判断で、岩井さんはちつとも知らないことです。

三好 そうですか。

岩井公館で、小泉さんと同じような仕事を同じような立場でやっていた人は、どれくらいの数いたわけですか。

小泉 一番多い時には、調査機関全部で五〇人から六〇人です。

三好 そんなにいたのですか。

小泉 同文書院関係者はその中で二〇人ぐらいです。ちょうど太原の総領事が腕

の立つ情報員が欲しいというので、私と同じように太原に行きました。閻錫山工作です。本省から囑託年俸が先に伝えてあったので、そのままの年俸で岩井公館から太原の総領事館に身売りしたようなものです。

岩井さんは最後の頃、すなわち上海からの追放、マカオ転出下命以降は全然連絡なく、自らも命に反して、いつまでも着任せず、その過去の榮譽の歴史に対して我々の信を失ったことは悲しいことでした。

軍隊での経験

小泉 私個人の決心で、四二年に早々と軍隊に行きました。やはり日本国民として兵籍をいつまでも延ばしては申し訳ないから。徴兵時に「あなたは中国語ができるが、なにか希望はあるか」ときかれたので、「ああ、中国へ行きたい」と答えると、すぐに中国に行かせてくれました。

乗馬部隊。でもそれまで馬のそばに

行ったこともない。それですぐに怪我して入院。退院してきたらみな馬に乗って走っているのに、こっちはまだ馬にも乗れない。行ってわずか一月くらいで入院したのだから、教育不十分で将校になる機会を失いました。部隊長が「小泉、お前は将校にはなれないけれども、まあ下士官でひとつやってくれ」と、下士官にはしてくれただ。将校になっていたら、あるいは一命をどこかで落としたかもしれません。

新四軍に対抗して、徐州から開封にくくあの隴海鉄路で鉄道警備をやりました。商邱と開封との間。ここには旧黄河の河道があって、それを越したら八路の根拠地山東省。ところが人徳かなあ、私が鉄道警備をやっているところには誰も来てくれず、呑気に暮らしていました（笑）。ただ勞工狩り、兎狩りは、実際にこの眼で見ました。中国人も可哀想に、各県に勞工狩りの割り当てがくるから金で泣く泣く集められた人を頭数だけ揃える。列車に乗せて日本まで送り届けられる途中に、蛇行して貨車が徐行するよう

なところで命惜しまずに飛び降りて逃げる。鉄道警備をやっているとそんなのを何回も見ましたよ。

馬場 それは山東で捕まえたのを列車で運んだのでしょうか。そうではなくて、隴海鉄路の沿線から運んだのでしょうか。

小泉 隴海鉄路の沿線から、奥の方からも運びました。我々が警備していた鉄道地域は河南省ですが、そこでもありました。呉長が関係するんだけど、その呉長はみな満州人、東北の人間です。いわゆる中国人からすると漢奸ですよ。始まりから漢奸。東北で日本と協力した連中、それが偽呉長になって日本が占領したところにすべていた。だから日本の軍隊が勝手に県政府や市政府を作っても、しゃんとした勢いで反論できるものはいない。

馬場 ほう。

小泉 汪兆銘は立派な人間でしたが、あとは華北から連れて来られたいいかげんな人間ばかり、老漢奸です（笑）。

私の警備していた鉄道地帯では、

ちょっと田舎に入ると八路軍が一晩のうちに濠を掘って夜襲をかけてきました。

私は一度だけ、小さな討伐行動で逃げ遅れた小部隊の政治委員らしい人の雑記帳の戦利品をあげたことがあります。その記録の詳細さ、軍規の正しさと共に、簡体字のはしりの文字が多く使われているのに驚きました。まさに辺区政府の文教政策がうまく行っている証拠を見た感じがした。

馬場 はい。

敗戦後

小泉 戦争に負けると、軍隊なんて、はいさよなら。すぐ柳行李一本持って現地除隊しました。

馬場 現地除隊ですか。

小泉 住み慣れた土地だから、上海へ行くとか。

三好 どこで除隊されたんですか。

小泉 湖北省の老河口の米空軍基地に対するいわゆる最後の大陸打通作戦に参加した時です。私は大きな作戦に二回ほど

行った。警衛部隊は、農家を滅茶苦茶に荒らす、一頭の馬も草を食べて畑を荒らすからね。老河口まで行く途中で戦争に負けて、軍隊で徐州まで出てから、私は新四軍の地域を通って上海に行きたかった。

当時、潘漢年が上海市長になっていたことは知らなかったけれど、なんか上海に行けば昔馴染みに会えるだろう。他の学校の友達は将校になって威張っていたから、経済事犯で捕まりそうだからと逃げ隠れしているけれども、私は中国共産党の連中に悪いことはしていないと、大威張りで上海へ行こうと思っていた。国共間は解放戦争で揉めているから危ない、そんなのに巻き込まれたら犬死してしまうと言われても、「いやあ、話せばわかるよ」とそんなことを言っただけでも結局行きませんでした。

部隊を辞めてから、私が警備してたころの県長つまり漢奸が、捕まると怖いと着いて来ていた。「小泉さんに着いていけばいいだろう。身を隠すのになどこか見つけてくれる」。そこで食い繋ぎの商売を

やりました。委託販売です。引き揚げていく日本人の家具を、盗まれるよりいいと、県長つまり漢奸に金を使わせて、元の国民党の軍隊などに渡りをつけた。夜のうちに、日本人の家財道具などを委託を受けて運びだして、手数料を貰った。店舗も構えていました。

もう軍隊は嫌だし軍籍にあったこともなんとも思っていないから、「はいさよなら」でおしまい。だから帰国してからも何の届けもしない。普通中国に三年から五年もいればかなりの軍人恩給になるんだけれど。中曽根なんていまだに軍人恩給貰っているだろうな。

馬場 部隊名はおわかりになりますか。覚えてらっしゃいますか。

小泉 忘れましたが、原隊は豊橋の独立騎兵第四旅団です。部隊が全部外地に出払ったあとは、兵舎は予備士官学校になっていきます。豊橋は当時、軍都として高師原練兵場など騎兵部隊好適の立地だったと思いますね。最近になって、我々の原隊員が先年「軍馬鎮魂碑」を旧陸軍墓地に建立したとの話を聞いて、参拝に

行きしみじみ深い因縁を感じたものです。

馬場 北支那方面軍所属ですか。

小泉 はい。徐州は北支と中支の境目で、北支です。

三好 それで、委託販売をやったりしながら、南下して……。

小泉 南下も出来ない。

ご要望に応じて、袁殊のことをお話ししましょう。戦争に負けた後、彼は潘漢年のところに……。

三好 やはり逃げ込むしかない。

小泉 潘漢年を頼って、新四軍にもぐりこんだ。

拓殖大学卒でこの前亡くなった武井竜男は、袁殊と行動を共にした。私は、袁殊とは上海以外ではときどき香港にいた時だけしか会わなかったけれど、その袁殊と潘漢年も一緒だったのか、鎮江、揚州辺りのルートを経て、新四軍の方に入っていくルートがあって、それで三日か四日か旅行している。それともう一人いた。戦争に負けてから武井竜男が袁殊の關係で新四軍に潜って、大連から……。

三好 東北に行つて、海南島まで降りて行つた人たちの中に入つた人ですか。

小泉 いや。同文書院の一年後輩で富岡健次といひます。これも早くに亡くなつたけれど。

馬場 内戦が始まる時に、新四軍の一部は山東を経て、山東半島から東北へ行きますね。

小泉 それほど広範囲には移動せず、割合に早くに帰つてきました。その人が『新四軍潜行記』だったか、題名ははつきり覚えていませんが本を出しています。

三好 富岡健次でしたら、『中共軍と行く——特殊工作員の手記——』(リスナー社、一九四九)という本がありますよね。大きな本ではありませんが。上海から、やはり鎮江を通じて、新四軍地区に行つて、彼らと一緒に活動しながら、とは言つても、彼らの部隊の中の一部の人と北に行つているんです。それを古本屋で見つけて……。

小泉 富岡さんはまだ奥さんが健在だと思ひます。彼は東京都出身で、岩井公館では私より一年下で、袁殊なんかと特に

親しくして、敗戦後、袁殊と行動を共にしたという噂だけども。

三好 戦争中、上海の経済調査局の、日本大使館の中だと思ひますが、その島嶼という人が新四軍の軍司令部のあつた塩城まで行つて、しかも新四軍の仲介によつて、高官粟裕や鐘期光と会見して帰つてきているんですよ。その報告記『中共新四軍第一師団蘇中軍区司令部視察報告』(中国経済調査処、一九四三)が東京の東洋文庫にあります。

小泉 東洋文庫に。

三好 はい、非常に面白かつた。

小泉 それは面白いでしょう。

三好 その時も岩井公館が直接絡んでいたかどうかは、わかりませんが……。

小泉 岩井さんは、自分自身のことよりも人の世話をよくした。だから岩井さんが心ならずも左遷されてマカオ辺りに飛ばされた時も、「軍はあんたの骨を拾うから、外務省なんて飛び出して来い」というような誘いがいくらでもかかつてきたらしい。ところがそれを断つて。

戦後になつて、岩井公館にも一応関係した児玉誉士夫がうまく軍人に取り入つて、海軍の物資集めで金の延べ棒をたくさん持つて帰つたという噂で、それが政治資金になつて、戦後の政界の黒幕になつたといわれている。戦後、何しようかと大阪辺りをうろろろしていた時に、

児玉誉士夫が子分を十人ばかり連れてくるのに、心齋橋辺りで会つたことがあります。「小泉君。今日一杯酒飲もうや」俺の仕事、手伝わんか」つて(笑)。

馬場 それは戦後の話ですか。

小泉 はい。それから児玉誉士夫の棒皇隊以来の兄弟分、岩田幸雄は広島あたりで競輪屋をやり、笹川良一は競艇で大儲けをした。

戦後、我々にとつて最も哀れだつたのは、特調班の資料の最大提供者であり、太平洋戦争以降表面に出て上海『申報』の社長となつた陳彬和の末路です。文化戦犯第一号と噂されながら、大陸から逃れて香港に来て、ついに岩井さんのところに転がり込んできた。敗戦国だから、岩井さんも不本意ながら充分な面倒を見

切れないまま、彼は遂に日本で死んだ。日本に墓があります。

三好 戦犯では引っぱられなかったのですね。

小泉 はい、逃げ切った。岩井さんも、戦争に負けてから河童が丘に上がったようなもので、助けを求めてやってくる人たちにも十分なことのできないから辛かったらと思うます。それで、救援活動をするために金を集めたりして、アヘンを扱った里見さん……。

三好 里見甫氏ですね。

小泉 我々も岩井さんも銭が足りない時には、里見さんから貰っているんだよ。里見さんは、岩井さんの五年先輩で三期です。

三好 戦争中ですか。

小泉 そう。彼はやはり親分です。

馬場 これは中国側の資料に基づいて以前に書いたんですけれども(「日本の中国侵略と秘密結社」「秘密社会と国家」勁草書房、一九九五)、要するに日本が上海の青幫を味方につけるために、杜月笙は重慶に行きますが、上海の組織は残ります

から、杜月笙のアヘンの流通ルートは残りますよね。それで、日本が杜月笙のアヘン流通ルートの一部を渡して、杜月笙ではない方の青幫の親分を漢奸にすることをやったと思うのですが、その辺はいかがですか。実際に上海にいらっしやっ

て。

小泉 わからない。

三好 最近では西木正明氏の『其の逝く所を知らず——阿片王・里見甫の生涯

——(集英社、二〇〇一)が出て、なかなか面白かったんですけれども(笑)。これを読むと、今、馬場さんがおっしゃったような青幫のアヘンルートの問題も出てきます。ただ、あの本だとやはり、日本の大使館・領事館の関係とうまく書ききれなかった面があったと思いますけどね。

小泉 ああ。

三好 まあそこまでの資料がないのか、あるいは実際にあったとしても、なかなか出しにくい資料ということもあるのかなと思っただけです。

小泉 岩井さんの本で参考になる、潘漢

年との関係はその程度だと思えます。

三好 ただ上海時代の、影佐工作など、汪兆銘の引き出し工作も含めて非常に重要な話ですから……。

小泉 どうぞ、よければコピーをして下さい。

岩井さんも、潘漢年の思い出の最後のところ、うまいこと書いてある(笑)。そう思うでしょう。

三好 ええ。

小泉 ともかく、中共の大陸制覇の舞台裏での功労者潘漢年が、生まれ故郷に近い上海に錦を飾った途端、失脚の悲運に泣く彼のために「狡兎死して走狗烹られ、高鳥尽きて良弓藏され、敵国破れて謀臣亡ぶ」の嘆きを得ない(岩井英一著「回想の上海」一六七頁)。

三好 潘漢年については最近ようやくこういつたきちんとした伝が出るようになってきたところですね。

小泉 それから、元東京大学教授で、今は桜美林大学教授をしている、『上海物語』などを書いた……。

三好 丸山昇さんですか。

小泉 はい、その「潘漢年について・初稿——一九三〇年代群像の一——」（『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』汲古書院、一九八六）という資料を見たことはありますか。今回、それを探したんだけども出てこなかった。

丸山先生は魯迅の研究者で、魯迅の周辺に潘漢年がよく出てくることから取り上げられたのでしょう。潘漢年についての「初稿」としてですから、なにか考えがあったんでしょう。その後、私は桜美林大学をちよつとした機会にたずねたことがあります。あそこは北京大学と一年交代で先生方同士の研究交換を行なっているのです、それを一回参観させてもらったのです。その学生が、潘漢年についての卒業論文を書いていました。

三好 学部の卒論にですか。

小泉 桜美林の大学院かな。その論文を貰ったんだけど、それもやはり丸山先生の指導だと思えます。彼女は残留孤児三世で、潘漢年をテーマにして「中国革命の精神」というようなタイトルで論文を書いていました。それではこの辺で

私の話は終わりにさせてもらいます。

馬場 本当はもつと早く、小泉さんに愛知大学関係者がお話を伺うべきだと思っていました。私どもは九七年に愛知大学に来たので、それまでは愛知大学とは直接関係がなかったんです。むしろ前からいらつしやる方が、お話を伺うべきだったと思っていました。

本日は長い時間、大変興味深いお話をしていただいて、本当にありがとうございます。ありがとうございました。

（二〇〇一年二月八日）

（テープ起こし）山岸健太郎